

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02585

研究課題名(和文) ラテン詩文のイタリア人文主義者における受容の解明

研究課題名(英文) A study of the reception of Latin poetry among Italian Humanists

研究代表者

日向 太郎(園田太郎)(Hyuga, Taro)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40572904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、14世紀のイタリアの人文主義者、とりわけペトラルカの活動を辿った。カトゥッルス、ティブッルス、プロペルティウス、タキトゥスといったラテン作家たちは、14世紀末迄ほとんど知られていなかった。忘れられた作品の写本の再発見に大いなる貢献をしたのは、ペトラルカとボッカッチョである。例えば、プロペルティウスについては、ペトラルカはライデン本を発見し、自分用にこの詩人の写本を作成した。本研究は、ペトラルカとプロペルティウスの作品を読み比べることによって、前者が後者からいかなる影響を受けたかを解明することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ペトラルカは詩人、人文主義者としてヨーロッパの近代文化の大きな潮流を作り出した。紀元前1世紀後半のローマに活躍したプロペルティウスは、彼によって再発見された重要な恋愛エレゲイア詩人である。本研究では、ペトラルカとプロペルティウスを読み比べ、前者が後者をどのように読み、自己の創作に生かしたのかを探求した。文学ジャンルについての意識、文学的表現、詩集の構成という点で、ペトラルカが従来考えられてきたよりもプロペルティウスから大きな影響を受けて来た可能性が大きいことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：The present study traced the activity of Italian humanists during the fourteenth century, of Petrarch above all. Some Latin authors like Catullus, Tibullus, Propertius and Tacitus had remained almost unknown until the end of the fourteenth century. It is Petrarch and Boccaccio that contributed greatly to the rediscovery of the manuscripts of forgotten works. For example Petrarch produced a Propertian copy after the codex Leidensis Vossianus Lat. 38. From this copy, although now lost, descends another one, codex Laurentianus 36.49. This study aimed to elucidate how Petrarch was influenced by Propertius through the comparative reading of two poets with the aid of Petrarch's epistles and marginal annotations written in the above mentioned codex Laurentianus 36.49 which can be thought to show certain traces of Petrarch's understanding of Propertius.

研究分野：西洋古典学

キーワード：プロペルティウス ペトラルカ 古典の再発見 古典の受容

1. 研究開始当初の背景

ペトラルカの研究については、我が国においては、すでに近藤恒一(『ペトラルカ研究』創文社 1984、『ペトラルカと対話体文学』創文社 1997、『ペトラルカ―生涯と文学』岩波書店 2002、『新版ペトラルカ研究』知泉書館 2010)や佐藤三夫(『ヒューマニスト・ペトラルカ』東信堂 1995)によるペトラルカについての優れた研究が、少数ながらも存在した。さらに、近藤恒一はペトラルカのラテン語の著作でもとりわけ重要な『わが秘密 *Secretum*』や『無知について *De sui ipsius et multorum ignorantia*』、『ペトラルカ=ボッカッチョ往復書簡』(いずれも岩波文庫)を邦訳している。また、16世紀のペトラルキズムについては、土居(仲谷)満寿美による(博士学位論文『ピエートロ・ベンボ研究―その文学理論と詩作について』東京大学 1996)および同氏によるベンボ著『アーゾロの談論』の邦訳(ありな書房)もある。

一方、西洋古典の伝承史にかかわる研究は、たとえば研究代表者である日向太郎の大学院時代の指導教員だった久保正彰(*Sappho-Ovidius-Renaissance* 『地中海学研究』8 [1985])、片山英男(『Miscellanea 研究』『東京大学文学部研究報告語学文学論文集』7 [1982]、『バルツィツァ書簡緒言集』(校訂版)勁草書房、1993)らの優れた成果がある。

とはいえ、欧米の研究状況と比べると、日本の人文主義者研究、古典受容研究は全般的に見ていまだ手薄である。当然ながら、欧米においては、古典受容研究は古い伝統を有する。しかし、そうは言っても、本研究が最終的に目指すような俗語作品における古典作品の受容の探求が本格化し始めたのは、やはりここ最近の数十年である。欧米のなかでも、とりわけイタリアにおいては(ペトラルカにかかわる)研究が進んでいるが(たとえば、A. La Penna, *L' integrazione difficile. Un profilo di Properzio*, Torino 1977 および AAVV., *Properzio nella letteratura italiana*, Roma, 1987、本研究の規範となる J.H. Gaisser, *Catullus and His Renaissance Readers*, Oxford 1993 など)、全体的に見て研究の歴史は比較的浅く、本研究課題が新しい知見の開拓に参与する可能性は残されているように思われた。また、ペトラルカが16世紀のヨーロッパにおいて注目されるようになり、ペトラルキズムという現象を作り出したことを思えば、ペトラルカの『俗事詩片』とローマの恋愛詩の比較研究は、イタリア学に貢献するのみならず、ヨーロッパ近代文学の誕生の解明にも少なからぬ意義を持つと言ってよい。

2. 研究の目的

イタリアの人文主義者が行った古代ギリシア・ローマの古典研究の跡を、できるだけ具体的にたどり、彼らの活動を再構成し、その成果を意味づけることを目指した。とりわけ、14世紀に至るまでイタリアにおいて、その作品が広く知られることがなかった古代ローマの詩人、カトゥッルス、プロペルティウス、ティブッルスが与えた影響を考察の中心対象とした。日向は、「プロペルティウスの文学理論と創作実践の解明」(2011~2013年度)および「ティブッルスとプロペルティウスの比較研究に基づく恋愛エレゲイア詩の進化の解明」(2014~2016年度)の二つの研究課題を通じて、上記のラテン詩人についての研究を重ねて来た実績がある。また、人文主義者がイタリア語による創作を手掛けている場合、当該作品を分析し、古典作品が近代文学へ及ぼした影響とその意義を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

カトゥッルス、プロペルティウス、ティブッルスの作品の継続的な精読に努めた。その一方で、これらの詩人たちから着想を受けたと思われるイタリアの人文主義者の著作もできるだけ通観した。その著述、とりわけ古典学研究についての重要な証言を含むと考えられる書簡を通して、人文主義者の研究活動を再構成することを目指した。また、ペトラルカやボッカッチョらの文芸作品に古典の影響の表れや模倣を指摘し、影響や模倣が何を意味するかについて考察した。

こうした文献精読、作品分析に基づいて、少なくとも1年に1回は、学会や研究会の場を借りてその研究成果を報告した。随時、海外から西洋古典伝承史や受容研究にたずさわる研究者を招聘し、合同で研究会を行った。

4. 研究成果

(1) ペトラルカのプロペルティウス受容については、日本西洋古典学会第68回大会(2017年6月4日於千葉商科大学)において「プロペルティウスとペトラルカ--二人の恋愛詩人をめぐって」という題目で研究発表を行った。ペトラルカは、畢生の作である恋愛詩集『カンツォニエーレ』においてラウラへの恋愛感情を歌った。一人の女性との出会いが創作の発端となり、彼女の美しさが創作の源泉として詩人に詩的靈感を与えるという体験の告白は、清新体派詩人の伝統に与るものである。その伝統は、本来ローマの恋愛詩とは独立したものだと思われる。そのような文化的状況において、ペトラルカは一人例外的にプロペルティウス作品を再発見し、そこに文学的傾向にかんじて自己との著しい類似性を認めた。プロペルティウスは、その詩集のなかでほぼ一貫して恋人キュンティアについて歌い、やがて彼女と別れ、彼女に先立たれるという体験を歌っている。同様に恋人ラウラに先立たれたペトラルカにとって、プロペルティウスは重要な範例となる。しかも彼はその範例を、当時他の文人が知ることもない秘密の作品として独占していたのである。本発表では、プロペルティウス第4巻第7歌および第11歌とペトラルカ『カンツォニエーレ』第359歌とを比較して、またペトラルカの『親近者書簡』の証言やペトラルカが所有していた写本の直接の写しであるF写本の欄外注を援用して、プロペルティウスが『カンツォニエーレ』の着想や構成に重要な影響を与えた作家であることを例証した。この研究発表をまとめて、学会誌『西洋古典学研究』66(2018)に寄稿した。

(2) 2017年には、「ティブッルスとプロペルティウス--ティブッルス第1巻第8歌におけるプ

ロペルティウスへの言及--」(『言語・情報・テキスト』(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要)24、15-26)において、プロペルティウスと同時代の恋愛エレゲイア詩人ティブッルスとを比較して、恋愛詩という文芸ジャンルに対する両者の態度の違いを論じた。ティブッルスが、プロペルティウスの第1巻の言葉遣いや着想を模倣しながら、全体として叙事詩に対して気張った態度を示すプロペルティウスを揶揄し、独自の恋愛エレゲイア詩観を示していることを論証した。

(3)2018年の5月下旬~6月上旬には、イタリアのウディネ大学で「ルネサンス文学」を担当するマッテオ・ヴェニエル Matteo Venier 教授を招聘した。ヴェニエル教授は、ペトラルカの古典受容にかかわる研究として、日本西洋古典学会第69回大会6月3日(於名古屋大学)において講演し(“Petrarch and Silius Italicus: a Survey on Controversial Topic”)。ペトラルカがシリウス・イタリクス『プニカ』を知っていた可能性や、影響を受けた可能性について否定的な見解を示した。このヴェニエル教授の講演は、日本西洋古典学会の欧文誌 *Jasca* 4(2020)に掲載された。この他、東京大学においてイタリア文学における古典受容(“The relations between the poem of Ariosto *Orlando Furioso* and his precursors (Ovid in particular)”)アリオスト『狂えるオルランド』と古典作家(とくにオウィディウス)との関係)についての講演、アリオストとタッソの英雄叙事詩作品の比較研究にかかわる講演(“I rapporti fra Ludovico Ariosto *Orlando furioso* e Torquato Tasso *la Gerusalemme Liberata*”)を依頼した。一連の講演会を通じて、我々日本の西洋古典研究者は古代ローマの文学がヨーロッパ文学に果たしてきた役割について、知見を深めることができた。

(4)イタリアのサン・ダニエレ・デル・フリウーリ市立図書館(Biblioteca Guarneriana)と(3)で述べたヴェニエル教授からの招聘を受けて、ラテン語文献学・古文書学サマースクールにおいて、上記研究(1)の英語版(“Petrarch and Propertius: An Example of Intertextuality”)を講演した(2018年6月14日於サン・ダニエレ・デル・フリウーリ市立図書館)。講演後、ヴェニエル教授らからこの考察を改良するための貴重な助言と献身的な研究協力を受けた。それは、(9)の著書を出版する際にも役立っている。なお、このサマースクールは、若手研究者のラテン語写本読解技術の向上を目的とした研究会であり、上記図書館、イタリアのウディネ大学とトリエステ大学、アメリカのオハイオ州立大学の所属教員が参加し、合同で若手研究者の指導や講演を行っている。

(5)2018年には、ホメロス叙事詩の口演と編纂事業について考察した「ペシストラトスによる叙事詩の編纂」を発表した(『言語・情報・テキスト』(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要)24、67-77)。キケロ『弁論家について』、『パラティン詞華集』(第11巻第442歌)パウサニ阿斯『ギリシア案内記』、アイリアノス『ギリシア奇談集』、プルタルコス『リュクルゴス伝』、伝プラトン『ヒッパルコス』には、ホメロス叙事詩の口演や編纂についての証言が含まれる。これらの証言を比較検証した上で、ホメロス叙事詩が文字に記される過程をを解明するにあたっては、どのような仮説を立てるのが妥当であるのかを考察した。

(6)2018年11月29日には、(3)で挙げたヴェニエル教授の企画によって、ウディネ市立図書館(Biblioteca civica di Udine)から招待を受け、日向が2016年末に刊行した訳書、パウルス・ディアコヌス『ランゴバルドの歴史』(知泉書館)の出版を記念して、講演会が催された(ウディネ市が州都となっているフリウーリ州は、作者パウルスの出身地ということで、ランゴバルドはこの都市と縁が深い)。講演者は、ウディネ大学のラウラ・パーニ Laura Pani 教授と日向の二人であった。パーニ教授とは、(4)で述べたサマースクールでも、共同で講演を行っている。日向は、ここで翻訳や出版に際しての苦心や訳書の反響について語った。この講演は、後日 *Società Filologica Friulana* (フリウーリ言語研究協会)の機関誌に掲載された(“La prima traduzione giapponese della *Historia Langobardorum*”, *Ce Fastu?* 94 [2018]1-2, 105-110)。

(7)2019年3月26日には、ピサ大学の招待を受けて、キール大学のアレッシオ・マンチーニ Alessio Mancini 研究員と合同で講演会を開催した。日向には、オウィディウス『恋愛術』第2巻に含まれるオデュッセウスとカリュプソの対話について研究報告を行った(“Conversando in spiaggia, Ovidio in *Ars* 2.123-144”)。この報告の日本語版「波打ち際の語らい--オウィディウス『恋愛術』第2巻123-144行--」は、今年度刊行予定である。

(8)(4)で言及したサマースクールは、2019年夏にも行われた。(1)でも述べたように、F写本はペトラルカが所有していたプロペルティウスの写本の直接の写しと考えられるが、個別の歌の区別にかんして、現代の校訂本とは異なった様態を呈している。たとえば、第2巻第31歌は第32歌とは区別されず、一続きの作品を形成している。二つの歌は、16世紀以降個別の歌として見る傾向が生まれたが、近年 Goold や Heyworth は、行の移動などの処置を施して二つの歌を合併する。日向は、第2巻第31歌が個別の詩として形式的かつ主題的な独立性を備えていることを示し、二つの歌を分離することを主張した(“How Propertian Elegies Should Be Divided and Distinguished: the Case of Prop. 2.31 and 2.32”)(2019年7月19日於イタリア、サン・ダニエレ・デル・フリウーリ市立図書館)。なお、この報告の日本語版は、2020年刊行予定の浜本裕美・河島思朗編『西洋古典学のアプローチ--大芝芳弘先生退職記念論集--』(晃洋書房)に掲載されることになっている。

(9)2019年7月末には、著書『憧れのホメロス-ローマ恋愛エレゲイア詩人の叙事詩観』(知泉書館)を刊行した。プロペルティウスは、その詩集の随所において叙事詩創作の辞退を表明し

ている。これは、ヘレニズム文学において支配的な綱領であり、前1世紀のローマの詩人に受け継がれたカリマコス主義に基づく発言である。しかし、その反面でプロペルティウスは、ホメロス叙事詩への憧憬を隠すことはできず、トロイア伝説を主とする神話世界への言及を行い、自らの恋愛詩を神話世界と結び付けて構築している感が強い。それは詩集最終巻の第4巻の第7歌、第8歌において如実に表れている。本書は、こうしたプロペルティウスが抱える相反する態度の並存、恋愛エレゲイア詩と叙事詩との緊張関係を明らかにすることを目指した。そのような目的に即して、(2)で述べた論文(「ティブッルスとプロペルティウス--ティブッルス第1巻第8歌におけるプロペルティウスへの言及--」)を加筆修正の上で収録した。また、ホメロス作品を入手し、これを知ることがを熱望していたペトルルカは、恋愛詩集『カンツォニエーレ』と並行して、叙事詩『アフリカ』を完成することを目指した。ホメロスに憧れ、また二つの文学的ジャンルの両立を目指すという点で、プロペルティウスが抱えるジャンルの相剋の問題にも通ずる。このように考えて、(1)の「プロペルティウスとペトルルカ--二人の恋愛詩人をめぐって」を加筆修正の上収録した。

(10)2020年3月、村松真理子、横山安由美編『世界文学の古典を読む』(放送大学教育振興会)が刊行された。これは、放送大学の印刷教材である。日向は、第3章古代ローマ1『アエネイス』、第4章古代ローマ2『黄金のろば』、第15章「テキストと旅」第2節(「ホラティウスのアッピア紀行」)を担当した。

(11)プロペルティウスについての最新かつ重要な研究として、Arcangela Cafagna, *Dal contesto alla costituzione del testo*, Nordhausen 2016 の書評を『西洋古典学研究』67(2019), 121-123 に寄稿した。また、我が国におけるすぐれたロマンス語研究の書として、小林標著『ロマンスという言葉--フランス語は、スペイン語は、イタリア語は、いかに生まれたか--』の書評を『西洋古典学研究』68(2020)に寄稿した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 日向太郎	4. 巻 25
2. 論文標題 ペイシストラトスによるホメロス叙事詩の編纂	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語・情報・テキスト	6. 最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Taro Hyuga	4. 巻 44
2. 論文標題 La prima traduzione giapponese della Historia Langobardorum	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CE FASTU?	6. 最初と最後の頁 105-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日向太郎	4. 巻 67
2. 論文標題 Arcangela Cafagna, Dal contesto alla costituzione del testo, Nordhausen 2016（書評）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 121-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日向太郎	4. 巻 66
2. 論文標題 「プロペルティウスとペトラルカ-- 2人の恋愛詩人の接点をめぐって--」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』	6. 最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 日向太郎	4. 巻 24
2. 論文標題 「ティブッルスとプロペルティウス--ティブッルス第1巻第8歌におけるプロペルティウスへの言及--」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『言語・情報・テキスト』（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要）	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 日向太郎	4. 巻 68
2. 論文標題 小林標著『ロマンスという言葉--フランス語は、スペイン語は、イタリア語は、いかに生まれたか--』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 131-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Taro Hyuga
2. 発表標題 Petrarch and Propertius: An Example of Intertextuality
3. 学会等名 Summer School of Philology and Paleography San Daniele del Friuli (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taro Hyuga
2. 発表標題 La prima traduzione giapponese della Historia Langobardorum
3. 学会等名 la Biblioteca Civica di Udine (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taro Hyuga
2. 発表標題 Conversando in spiaggia: Ovidio, Ars 2.123-144
3. 学会等名 Universita' di Pisa (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村隆・日向太郎
2. 発表標題 セッション1「古典」
3. 学会等名 パスカル・キニャールとの対話（於東京大学教養学部）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日向太郎
2. 発表標題 プロペルティウスとペトルルカ-- 2人の恋愛詩人の接点をめぐって--」
3. 学会等名 日本西洋古典学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Taro Hyuga
2. 発表標題 How Propertian Elegies Should Be Divided and Distinguished
3. 学会等名 Summer School of Philology and Paleography San Daniele del Friuli (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日向 太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 192
3. 書名 憧れのホメロス	

1. 著者名 日向太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 311
3. 書名 村松真理子・横山安由美編 世界文学の古典を読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----